

既読無視はなぜ非難されるのか —大学1年生へのインタビュー調査を通じて— Why Was Read Message Neglect Blamed? from Interviews to First-year University Students

種村剛
Takeshi TANEMURA

中央大学文学部 Chuo University

Abstract In this paper, we will discuss read message neglect (kidoku-mushi) in social media communication. We conduct some interview surveys to clear how first-year university students think about read message neglect, and how they respond to it. The following results are five points. 1) They divide message passing into two types. One type is not to answer messages of question. Another type is to ignore consummatory messages. 2) They criticize the former type neglect. 3) They do not expect any time to get a response in consummatory communication. Despite there is no reply when they feel disappointed. Therefore they recognize that read message neglect is an offense. 4) They seek some means to be faced with negative emotions associated with read message neglect. 5) They feel more insecure about no reply from arm's-length friends than from close friends.

キーワード 既読無視 ソーシャルメディア LINE コミュニケーション

1. はじめに

近年、LINEにおける既読無視が社会問題化している。そこで、大学生が既読無視をどのように認識しているか、そして、既読無視に対してどのような対応をしているのかについて、インタビュー調査を実施した。

2 調査の概略

2.1 対象者

講義を担当している大学1年生に、講義終了後、既読無視についてのインタビュー調査のお願いを口頭で発表した。レスポンスカードに、調査を受けてもよいと記した学生(9名)に対して、インタビューを行った。

2.2 実施の日時・場所

調査は、2014年の5月23日から30日の間に、大学の教室およびフリースペースで、1人約20-30分行った。2人同時に行ったインタビューが2件(DとE、FとG)ある。インタビューの内容は許可を得てICレコーダに録音している。

2.3 インタビュー項目

インタビュー項目は、次のように構造化している。
(1) フェイスシート(氏名、年齢、性別)。(2) ケータイとスマートフォンの所有歴、および、SNSの使用歴(mixi、Twitter、Facebook、LINE)。(3) 「既読無視とはどのようなものか、どのような状態を既読無視と考えるか」についてたずねた。(4) 「既読無視をしたことがあるかどうか」を質問した。「したことがある」と答えたなら、既読無視をしたことを相手から非難されたことがあるかを確認した。この場合の非難とは、相手を責めるということだけではなく、理由の問いただしを含むものとした。「非難したことがある」と答えたならば、そのときの状況をたずねた。
(5) 「既読無視をされたことがあるかどうか」を質問した。「されたことがある」と答えたなら、その時ど

のような気持ちになったかを質問した。加えて、既読無視をした相手を非難したことがあるかを質問し、非難したことがあるならば、そのときの状況をたずねた。

(6) 「既読無視はよくないことか。もしそうだとするならば、その理由について教えて下さい」と質問した。

3. インタビューの結果

3.1 スマートフォンの普及とSNSの使用状況

調査対象者は全員大学1年生で、インタビュー時は18歳である。ケータイはスマートフォンを使用している。スマートフォンの使用時期は、早い者で中学卒業時(高校入学時)、遅い者で大学入学時。多くは高1から高2の間に、フューチャーフォンからスマートフォンに切り替えている。

LINEとTwitterは対象者の全員がおこなっていた。インタビューからはスマートフォンへの切り替えが、LINEやTwitterを始めるきっかけとなっていたこともうかがえた。

一方、Facebookは、9名のうち4名が使っておらず、3名がアカウントは持っているが情報収集用であると答えている。mixiは、そもそも使っていない、今も使っていると答えた者が1名ずついた。他の者は「使っていたが高校時代に使用をやめた」と答えている。今も使っていると答えた1名は、8人ほどの友人でクローズドな会話を楽しんでいると答えた。

3.2 コミュニケーションツールとしてのLINE

調査対象者の全員がLINEをコミュニケーションツールとして利用していた。

「LINEが一番使われている連絡手段。今は、メールのアカウントをお互い聞かないでLINEのアカウントで連絡をとるとというのが主流。大学でもそのようになっている。LINEは簡単にグループが作れるので、割と

手当たり次第に、LINEのグループを作って、そこで話さないこともあるんですけど、とりあえずつくっておく」(A)

「アドレス知らない人いますね、大学で。クラスの友達も知らないですね」(B)

LINEのアカウントは、かつてのケータイの電話番号やメールアドレスを代替していることがうかがえる。メールからLINEへ、スマートフォンを用いた大学生のコミュニケーションは、LINEの登場によって大きく変化したといえるのではないだろうか。

3.3 既読無視：既読から返信までの時間間隔

既読無視とはどのようなことを指すのかを質問した結果は、次の回答に要約できる。

「既読無視っていうのは、多分LINEを使っている人間に聞けば、だいたいみんな同じことをいうと思うんですけど、LINEを起動しておいて、会話しているグループなり相手なりのページを開いておくと、こっちが見たことになって、相手に既読っていうのが送られるんですよ。それで、こちらが返信を返さないと、既読無視、既読スルーってことになる」(A)

つまり、既読がついているのにもかかわらず、返信がこないと既読無視と判断されるのである。では、どのくらいの間隔があくと、既読無視になるのだろうか。学生が答える既読無視になる「間隔」の表現には、二通りある。

一つは、以下の回答にみられるような、客観的な間隔である。

「夜にLINEを送って、次の朝昼ぐらいに(LINE)見て、もう既読ついて返していないと、これは既読スルーかと。たいてい夜送るから[…]」(D)

「あーされたわーって、既読スルーって思う」(E)

「基本的に、LINEは、結構既読っていうのがついちゃうせいで、みんな急いで返すんですよ。見ると。なんで、既読ってついて、まあ1時間ぐらいして返ってこないと「ああこれは既読スルーなんだな」って」(A)

一方で既読無視にかかる時間間隔を次のように答える者もいる。

「既読無視、私の中ではですけど、やっぱり、既読っていうその人との会話のページを開いて、既読っていうマークが相手に見られた時点で、返さなかったら既読無視になってしまうと思っていて。それで、何分かたっても返ってこなかったら既読無視になると思っていて。ある程度普通に見てから、普通に返せる時間がたっても、返ってこなかったら既読無視になる。あるいは用件にもよると思うんですけど、そういうことを抜いて、普通に返せるのに返さないんだったら、既読無視かな」(C)

彼女は既読無視について二つのことを述べている。一つ目は「既読っていうマークが相手に見られた時点で、返さなかったら既読無視」である。同様の回答として、

「自分が既読をついているのを見てから5分ぐらいで既読無視」(G)

というものもある。このことは「相手が自分の(自分が相手の)既読に気がついた時点」から既読無視の時間のカウントが始まることを意味している。逆に言えば、既読に気がついていないのなら、既読無視にならないのである。

二つ目は「ある程度普通に、見てから、普通に返せる時間がたっても、返ってこなかったら既読無視」である。同様の回答として、次がある。

「そのまもってやりとりしていた頻度にもよるんですけど、もしそのふつうのリアルタイムで、ずっとぼんぼんぼんぼん流れていたら、うーん、その流れが途切れたらスルーだと思うんですけど、うーん、そうですね会話の流れが遮断されたらスルーかな」(H)

以上のインタビューから二つのことを読み取ることができる。一つは、自分は既読無視ではないと思っていても、相手が既読無視だと判断したならば、それは相手にとって既読無視であるということである。つまり、既読無視かどうかの判断は、相手の状況判断に依存していることがうかがえる。もう一つは、その間隔は「既読っていうマークが相手に見られた時点」であり「会話の流れが遮断されたらスルー」であるように、人と場合によっては既読無視であると判断する返信までの間隔はかなり短いものになりうることである。

3.4 質問のメッセージに答えない既読無視(1)：LINEのコンサマトリーな使用と道具的な使用の区別

上記のように、既読無視は、既読がついてから(あるいは既読がついたことに気がついたときから)返信がくるまでの間隔として理解されていた。

しかし、その一方で、インタビューからは、既読無視には別の理解のしかたがあることがわかった。それは「質問のメッセージに答えない」ことを意味する既読無視である。たとえば、つぎのコメントである。

「ちゃんと疑問形の文にすれば、だれか返してくれるんですけど、そういうのに返さないと既読無視。[…]たわいのないことで、無視されてもそんな、ちゃんと見ているんだと思うので…」(B)

「もし、相手が疑問文で聞いていることに対しては、既読無視は私はよくないと思うんですよ。聞かれていることに対して、ちゃんと返事をかえさないのは、よくないことだと思うんですけど、どうでもいいことっていったらあれですけど、自分が返す言葉が見つからないっておもったら、それは全然、平気だと思います」(I)

上記二つのコメントから次のことがうかがえる。

第一に、学生は、LINEによって送られてくるメッセージを、文型によってコンサマトリーなLINEの使用と、道具的なLINEの使用を区別していることである。

コンサマトリーとは、自己充足的の意味である。コンサマトリーなLINEの使用とは、LINEを用いてメッセ

ージのやり取りそれ自体を楽しむことである。その一方、道具的なLINEの使用とは、LINEを連絡手段として用いることである。学生の多くは互いのメールアドレスを知らないことも多く、LINEの使用において、コンサマトリーな使用と道具的な使用が混在している。

コンサマトリーな使用から道具的な使用を区別するために、学生は「文型」を用いている。LINEにおいて「疑問文」や「疑問形の文」で表された「質問のメッセージ」があらわれたら、それは相手が道具的に用いてきたと「状況の定義」を行っているのである。その一方で、学生は、コンサマトリーなメッセージを「たわいのないこと」「どうでもいいこと」と表現している。

第二に、インタビューにおいて、Bは質問のメッセージに返信しないことこそが「既読無視」だと主張している。一方、Jは質問のメッセージに答えない既読無視を「よくないこと」と位置づけることで、コンサマトリーな使用に対する「全然、平気」な既読無視と区別している。

学生は、LINEのメッセージのうち質問のメッセージについては必ず答えるべきであると考えている。それゆえに、質問に答えない既読無視は、よくないことであり、非難の対象になると考えている。このことは、BとJだけでなく、インタビューをおこなった学生全体に確認できる。例えば、次のようなコメントである。

「状況によっては、それこそ「必ず返してください」って最後に書いてあった場合は、返信するべきだと思うんですけど、それはメールと一緒にですね。「必ず返して」って書いてある場合はしなくてはいけないと思うけれど、それ以外の場合は…」(A)

「ハテナで終わっている。こっちが疑問形で終わっているのに返されないとかのときには、本当に腹立って思うし。こっちが本気で聞いている時に返してくれなかったりとか。たぶん未読無視されているんだなって思うときには、あーもうこの人は、あんまり頼らないでおこうって、そういうふうにはなっちゃいますね。

私も逆に、そういう疑問形できかれていたときには、絶対に返すので、そのへんは失礼かなって思います。結構大事だなんて思うときに、返さないのはどうなんだろう」(C)

「既読（無視）を怒るというより、質問答えて。質問答えないことに怒る」(H)

以上のように、質問のメッセージに答えない既読無視は非難の対象になりうる。このことは、質問に答える側も理解している。たとえば、Fは自分に投げかけられた質問のメッセージを「本気の内容」と表し迅速に答えようとしている。

「夜中でも、本気の内容なら夜中にきても返す」〔本気の内容とは？〕「勉強の「ここのんなこと」みたいな話とか、あとは、来週の何日みたいな予定の話とかなら、夜中でも返す」(F)

3.5 質問のメッセージに答えない既読無視(2)：個別LINEとグループLINEの区別

LINEは複数のメンバーと同時にコミュニケーション

を行うことができる、グループLINEと、個人と1対1でコミュニケーションを行う個別LINEがある。使用者はしばしば、複数の個別LINEを同時並行的に立ち上げ、複数の者と個別にコミュニケーションをとっている。

これらにLINEのコンサマトリーな使用と道具的な使用(質問)をクロスさせると、既読無視のパターンは、I(グループLINEにおける道具的な使用)、II(個別LINEにおける道具的な使用)、III(個別LINEにおけるコンサマトリーな使用)、IV(グループLINEにおけるコンサマトリーな使用)に場合分けをすることができる。

インタビュー全体をみると、既読無視について非難をされたり、したりする事例は、主にI(グループLINEにおける道具的な使用)の場合について多く語られていることがわかった。

グループLINEにおける質問のメッセージに対する既読無視を相手から非難された事例として次がある。

「本当に最近の話です。いままで、高校のときは友達と遊びのこと、くだらないことについて会話していたので特に問題はなかったんですけど、クラスでグループつくったじゃないですか、そこでまあQ君がいろいろ先導してやっている。で、それでQが、どれくらいすすんで？とか、いつ集まれる？とか(LINEでメッセージを)送ったときに、たとえば、そのとき手が空いていなかったり、まだ予定がわからなくて、まあ、結果的にスルーをしてしまったときに、Qが「返信してくれないと、どうなっているかわからない」と、「なにかいってくれ」と、ま、先日いわれまして」(A)

「うーん。たとえば、友達のグループLINEで「どこならいける、何日遊べるって人」って(質問が)きて、見てたけど、その私が最初に見たみたいで、だれも返信してなくて、ちょっと予定もまだわからないし、既読はちゃんとつけたけど、返信していないときに、後からみんな、いける、いける、いけないってきて「既読ついているのにH返信してないでしょ」っていうのはある」(H)

また、グループLINEにおける質問のメッセージに対する既読無視をされたことについて、次のコメントがある。

(グループLINEで)「予定は返して欲しいねー。しかもそれって一発目(の書き込み)でしょ、何度かして既読無視は全然平気。だけど、一発目にそれはないな「え、それする」って。出だしはね、出だしぐらいは返してって。用事じゃん[…]たいいて一発目って用事だから。返してーって」(D)

「全体LINEとかで(既読無視)されるとつらい。クラスとかでかいLINEで、なんか質問があったりして聞いて、既読だけばーっとついていくんですよ。だけどだれも返してくれないとき」(F)

それではなぜ、グループLINEでは、質問についての既読無視が生じるのだろうか。学生のインタビューからは、自分にあてた質問と判断できない場合、回答を留保し、他のグループのメンバーに回答を任せようとする傾向があることを読み取れる

〔疑問形に答えない既読無視をしたことはあります

か)「個人間のLINEではないです。グループのLINEでは、自分に聞いていないのかなと思って、他の人に返信をまかせることもありますけど、個人ではしないですね」(B)

「うーん。たとえばクラスのLINEとかだったら、けっこうみんなとも顔もしているし、仲もいいので、わりと「なんとかかんとかだっけ」って質問がきたら、返信しようかなって気がするんですけど、たとえば、サークルの新歓のために招待されたLINEとか、90人ぐらいいるLINEとかあるんですけど、とかだったらやっぱり発言しにくいかなと思って、そんなに自分が返さなくちゃいけない質問じゃなかったら、返さないときもあるかな。でも、グループの方が既読無視する頻度が高いかな」(H)

CはグループLINEで回答が滞る理由を「会話の流れ」の問題と見なしている。そして、Eは「会話の流れ」をつけるために、グループLINEにメッセージを出すように根回しをおこなっている。

「会話って流れってあるじゃないですか、誰かが言い出さなかったりするとだれも言い出さないのもある、そういうので、みんな既読をつけているけど、だれもしゃべらないとか」(C)

「だから、仲のいい子に、うらでつながっておくんですよ、これから(グループLINEで)いうから返事してねって、LINEで。けっこう根回しするんですよ。結構私それやる。いくよって言って、けっこうみんな来てくれる。そういう流れを作っておいて、みんなが言いやすくするけど。それでも来ないときがある」(E)

3.6 コンサマトリーな使用における既読無視(1) : 既読無視をしてしまう理由

質問のメッセージに答えられない既読無視がよくないものとされ、非難の対象となる一方で、コンサマトリーな使用の場合、メッセージのやり取りをする気がないのであれば、既読無視をすると答える者もいた。

「どのくらい既読無視をすることはありますか?」「一日に何回かやっちゃうかな。会話がだらだらつづいている場合には、ほんとうにけっこうやっちゃいます。個別のLINEで、けっこうだらだらしていた、もうどうでもいい会話だなんて思ったら、引き延ばしちゃうたりしますね。あえて時間をおいて返す」(C)

「既読無視しちゃうほう。終わる終わらせるは半々ぐらい。でも、相手によっては絶対にこっちが、返信をしないでおわっちゃう人と、絶対というか、あっちが返信しないでおわるのは決まっている気がします。それは人によって違う」(H)

このHの発言は次の示唆を与える。第一に、既読無視は、コンサマトリーなメッセージのやり取りを終結するための過程の一つであるということである。

第二に、既読無視をする人と、既読無視をしない人はだいたい決まっているということである。自分よりも既読無視をする頻度が高い人とのメッセージのやり取りは「相手が返信しないでおわる」ことになる。逆に自分よりも既読無視をする頻度が低い人とのメッセ

ージのやり取りは「自分が返信しないでおわる」ことになる。まさに「人によって違う」のである。

つまり、コンサマトリーなメッセージのやり取りをいったん休止するために、どちらかが既読無視をおこなう場合がある。ゆえに、質問のメッセージに答えられない既読無視とは異なり、コンサマトリーな使用における既読無視について、いちいち嘖き上がっているのは、LINEをうまく使うことはできないのである。このことをHは次のように表現している。

「スルーとかだけど、どっちにせよいつかはどっちかがどっちかの既読スルーの形でおわるじゃないですか、やり取りは。だからそれを前提にしているから、たぶん今の大学生とかは、既読スルーに対して、そこまでそんなに怒ったりとかはしないのは普通と思う、私の周りでは」(H)

3.7 コンサマトリーな使用における既読無視(2) : 既読無視をしない理由

上に示したように、インタビューでは、コンサマトリーな使用においては既読無視することがあり、そのような既読無視はしかたのないものだと考える者もいた。しかし、その一方で、コンサマトリーな使用でも返信する者もいる。

「メッセージがきたらどんなに面倒くさくても返す。基本的に返すんで、そういうことがなければ、基本は(既読無視を)しないですね。どんだけ面倒くさい内容がきても、基本返せるんであれば、返します」(G)

彼のいう「そういうこと」とは「メッセージを見て、返そうとしているときに充電が切れてしまう時とか、メッセージを見て用事が入ってしまったそのまま放置みたいになったとき」などメッセージの返信を阻害する事象が偶発的に生じた場合である。このような場合としてほかに「夜にLINEをしていて、寝てしまった、いわゆる寝落ちっていうやつ」を挙げる者(A)もいる。

次のコメントは興味深いである

「わたしは始めたばかりだから。返す。結構返す。メールは…夜は返さないけど。メールですぐ返信来たら逆に怖くない? LINEはいいけどメールだと、ちょっとちょっと空けよう。メールですぐに返ってくるのは逆に怖い。LINEはいい。LINEはすぐにかえさなきゃって思う。なんでだろう。ポンッって来るから、通知が、なんていうかチャットみたいな「いいね」とか「うん」とか、メールだと送らないじゃないですか。LINEだと送れる」(E)

大学に入学してからスマートフォンを使いはじめたEは、メールとLINEのメッセージへの返信を比較している。メールの返信がすぐに返ってくることは、メールが来ることを待ちかまえている(相手がケータイのメーラーをリロードし続けている)ようで逆に「怖い」のかもしれない。一方、EにとってLINEの「ポンッ」とくる通知機能(アーキテクチャ)は、短い返信を促進する要因として機能している。

なぜ学生はLINEの返信をかえそうと努めるのだろうか。「既読無視はあまりしない方」というBは、会話のアナロジーを用いて、次のように理由を述べている。

「自分は(既読無視を)よくないことだと思います。普通にしゃべっているときに、返事をしないことはないじゃないですか、直接しゃべっているとき。だけどLINEでは返事をしないっていうことが、正直自分は理解できないかなって感じ」(B)

一方相手の心情を気づかって返信すると答える者もいる。

「自分がしないのは、相手に悪く思われたくないっていうのがあって、相手の気分を害さないようにすることに気がついて、自分がするのは悪いことって思うんですけど、相手がするのはしょうがない。いいやつぶっているだけかもしれないんですけど。そうですね」(G)

相手の心情を気づかって返信をする(既読無視をしない)ということは、逆をいえば、自分が相手からコンサマトリーな使用において既読無視をされる側になったときに、心情を害することがあったということであろう。このことについては9)で補足する。

3.8 コンサマトリーな使用における既読無視(3) : 感情のギャップと生存戦略

上で私たちは二つのことを確認した。一つは、コンサマトリーな使用において既読無視は許容されていること。もう一つは、それでもなお既読無視をしないという者も存在し、その理由は既読無視をされる相手のことを気づかってであった。つまり、コンサマトリーな使用において既読無視は望ましくないが、仕方がないものだとして理解されている一方で、それが頭でわかっていたとしても、感情的には既読無視をされることは辛いものである。

そのことに気がついている学生は、既読無視に対する感情のギャップを軽減するための「生存戦略」を編み出している。

その生存戦略の第一は、LINE使用の抑止である。つまり、LINEをコンサマトリーなメッセージのやり取りになるべく使わないようにすることで、既読無視から生じる面倒を避けることである。例えばJは次のように述べている。

「LINEで会話する相手は、彼氏とは毎日しますが、それ以外の相手とは全くしないですね。本当に必要最低限だけ。メール機能がそのままLINEにうつただけだと私は思っているんで、メールよりも画面が見やすく、即時性、すぐ返せるところが、メールよりも利点だと思っているんで。メールではあんまりこうどうでもいいはなしをするタイプではなかったの、高校とか中学とか「あの子とメール夜中までした」話を聞いたんですけど、それはいまいまいちよくわからない」(J)

第二は、既読無視の作法としてのスタンプである。

「スタンプきたら終りだよ」(E)

「ああ終りだわって。出す気ないやって。みんなスタンプで締めるよね。私スタンプおさないけど」(D)

「Twitterも「お気に入り」でおわる。ああ、ファボられたーって。ファボって終わる」(E)

「だってぐだぐだしてきて、どうやって終わるのっ

てなっちゃう。そこで終わってくれるのなら、むしろありがたいって」(D)

スタンプは、LINEにおけるメッセージのやりとりの終結についての、自然発生的でインフォーマルな一種の社会規範の成立であり、それを自覚的に用いることで、既読無視を回避しようとしている。

第三に、キャラ化戦略である。キャラ化戦略には二つある。一つは、相手に自分が「既読無視する人格＝キャラクター」だと認知させる(される)ことによって、既読無視の非難を免れる戦略である。

「でも、それ(返信をかえさないこと)をみんなわかってくれているの。私はそういう人だから。Twitterで返してくれれば返すからって、忘れていただけの可能性も高いからって。高校のときも、そういう人ばかりとつきあってきたから、そういう人だとわかっているから、もう怒られない。最後らへんは、もうあきれられて終わる」(D)

もう一つは、「必ず返信をかえす側」に自分をキャラづけする戦略である。先のGは次のように語っている。

「会話を続けるタイプなので、どうしてもこっちがメッセージを送って会話が切れるというのが多いので。切れたら、そこまでの会話だったかなって思って、毎回そんな。気分害することなく、会話の切れ目かなと」(G)

Gは必ず返信をかえすので、Gとメッセージをやり取りする相手は、G自身と比較して相対的に「既読無視をする頻度が高い人」である。そのため、Gは「メッセージを送って会話が切れること」が多くなる。Gはそれを「会話の切れ目」として粛々と受け入れることで、感情の噴き上がりを押さえこんでいるといえる。

第四に、非難のネタ化である。コンサマトリーなやり取りについては、既読無視について指摘をうけるが、それは非難というよりも「ふざけて」「本気でない感じ」「軽い感じ」であり、既読無視は友人関係の会話のネタとして消費される。

「返さないよねーってネタとしていわれる。もう直接でも全然いわれる。「このまえの返してねーだろーお前って、2週間前に送ったの見てねーだろーって」「見てるよって」「あ、見てない」なんていわれるけど、でもまあ「ごめん」って、あんまり非難っていうか、ガチで怒る人はいないよね。みんな、ネタとして「おまえ返してないだろ」って、いわれるだけで」(D)

「本気でいわれたことは…、ない…」〔じゃあ本気でない感じでは?〕「本気でない感じでいわれたことはある。既読無視して次の日の朝、その友達と会った時に「無視すんなよ」そんなら軽い感じでいわれたことはある」〔そのときはどう対応する?〕「うっせえよ」みたいに返す」(F)

また、非難のネタ化はより親密な相手に対して「かまって欲しいこと」をアピールするように用いられることがある。

「恋人。でもそんなに心から怒ってはないけど、な

んかつかないと、してよーって感じで、反応してよっていかんじでするだけで、そんなに心から怒ったことは、ない。もう既読スルーしてんじゃないよっていうぐらい、心が開いている相手ならいえる」

ただし、以上に示した生存戦略（特に三や四）を自覚的におこなうのは、インタビューを行った対象が「大学生」だからかもしれない。次のようなコメントがある。

「私たちぐらいの年になると、わりと大人になってきていたりするから、そういうのもわかってきていると思うんですけど、もし私がまだ中学生ぐらいだったら、怒ったり、それでいじめにつながったりすることも考えられるなと思います」(H)

3.9 コンサマトリーな使用における既読無視(4) : 仲があまり良くない相手こそ心配

学生のコメントには、「仲のあまり良くない相手」の既読無視ほど心配になる傾向があらわれている。

「人によって、違うんです。仲のいいやつなら、こいつわざとだなんて。かるく腹立つんですけど、でも、どうせまた次の日に会って、逆におれが「無視すんなよ」みたいにいって、それでおわっちゃうんで」「仲が良くなかったら?」「仲の良くないやつだと、めっちゃ心配になりますね。昔の友達とか、最近会わない人に(既読無視)されると、やべえと思いますね。心配になる」(F)

「既読無視をされて不安になるのは?」「そんなに仲良くない人とか、ですね。もう気のおけない人とかだったら、多少、無礼講じゃないですけど、既読無視しといて、また次の話題を自分から出すとか、(既読無視)されといてまた別の話題を(自分から出す)とかやりやすいけど、そんなに仲良くない相手だったりすると、うーん、どうすればいいかな、とかなります」(H)

「仲のあまり良くない相手」の既読無視ほど心配になることは、コンサマトリーな使用に限らず、質問のメッセージに答えない既読無視の場合にも当てはまり、この場合は関係の解消までありうる。

「すごく仲が良い人だったりすれば、「ねえどうして返してくれないの」っていえるんですけど、それが微妙な距離だといえないから、もうこっちは…もういいって思うしかない。学校で会える人なら「返してよ」っていえるし、Twitterでよく絡む人なら、Twitterでも言えるんですけど、なかなか、たまーにしかしない人だと、いえないから、いえないから、向こうからもこないし、そこで結構、関係が切れちゃうこともある、あると思いますね」(C)

なぜ「仲のあまり良くない相手」の既読無視の方が気になるのだろうか。それは「仲のあまり良くない相手」の場合、その既読無視(スタンプすら返さない)は「本気」で自分とのメッセージのやり取りを拒否しているのかどうか分からないからである。相手の既読無視の理由を確かめるためには、直接会って確認するか、それができないのであれば(すでにメールがLINE

に代替されている状況では)LINEで再びメッセージを出して確認することになる。しかし、続けざまに自分からメッセージを出すことはばかられる(Hのコメント参照)。そのため、相手の心情を図りかね、気になり不安になるのだろう。

一方、現実には直接会える人とのメッセージのやり取りについては、互に気心が知れているため、既読無視をキャラやネタとしてお互い解釈することができる。これは先に挙げたLINEの生存戦略のうち、第二と第三に対応する。この点に注目するならば、LINEによるメッセージのやり取りは、対面的で親密な友人関係を前提とすることで、コンサマトリーな使用における既読無視に伴って生じる感情的な起伏(噴き上がりや不安)を抑制することが可能になり、安定的にコミュニケーションが維持されるようになるといえるかもしれない。

三点補足する。第一に、学生は、LINEにおける相手や自分の既読無視をネタやキャラとして互にゆるしあうことを通じて、現実の友人関係を再帰的に作り直し、親密さを維持しているように思われる。このようなLINEの特徴は他のSNSにはみられないように思われる。その意味で、LINEは現実の友人関係を補完するツールともいえるだろう。

第二に、LINEは現実の友人関係を再帰的に作り直しているとする第一の指摘を逆から眺めれば、コンサマトリーなLINEの使用は、現実の人間関係が反映(リフレクト)しているともいえるだろう。

第三に、LINEの互いの既読無視をネタやキャラとしてゆるしあえないことは、現実における友人関係を疎遠にしていける可能性もあるだろう。「最近会わない人(既読無視)されると、やべえと思」うのは、友人が友人でなくなってしまう可能性への不安なのかもしれない。もしかしたら、学生たちは「ノリ」を「共振」できなくなったとき、友人関係が解消してしまうことに自覚的なのかもしれない。

4. まとめ

LINEの既読無視について、大学1年生にインタビューを行った。結果を次のようにまとめることができる。

第一に、学生は既読無視を、質問のメッセージに答えない既読無視とコンサマトリーな使用における既読無視に分けていた。

第二に、質問のメッセージに答えない既読無視が非難の対象となっていた。調査対象者は、グループLINEにおける、質問のメッセージに答えない既読無視について、非難したことや非難された経験を語っていた。

第三に、一方、コンサマトリーな使用における既読無視は、望ましくないが仕方がないものと理解されていた。しかし、それでもなお既読無視されることは辛いことであり、既読無視をすることは失礼なことでもあった。

第四に、コンサマトリーな使用における既読無視に伴う、感情の噴き上がりを抑止するために、学生たちは、LINEのコンサマトリーな使用を制限したり、自らをキャラ化したり、既読無視をネタとして消費したりしていた。

第五に、コンサマトリーな使用における既読無視については、仲があまり良くない友達ほど心配になると考える者がいた。このことより、LINEのコンサマトリーなやり取りは、現実の友人関係を前提とすることで、安定的に成り立つと推測した。

